

他力の積極性と協同性 - 劣夫跨驢のたとえに学ぶ -

大谷大学 井上尚実

① アミーナ・モハメッド国連副事務総長「SDGs 我々の包摂性を高めよう」

世界は不確実で不安定になつてゐる。国際協調が衰退し、経済成長は鈍化している。いくつかの国や地域では内向きな対応により、分断や排除の傾向を強めているが、短絡的な思考は状況を悪化させるだけだ。

今日の世界的な課題の多くは、経済や社会の枠組みの根底に、排除と差別が何千年もはびこつてきたことに根ざしてゐる。植民地支配から気候変動の危機まで、排除と不寛容、互いの違いに敬意を払わなかつた結果が私たちを追い詰めているのだ。

不平等も広がる一方だ。2030年までには1%の富める者が地球上の富の3分の2を支配しかねない。少数者や周縁部に追いやられた人、特に難民や移民の権利は顧みられることがない。暴力で家父長制を強いることで、何百万もの女性と少女の人権が日常的に侵害されている。

気候変動で甚大な損害を受ける国や地域がある一方で、温室効果ガスを出し続ける国がある。森林破壊や魚のとりすぎ、環境汚染はかつてないレベルだ。すべての人々の権利と利益よりも、一部の者の短期的な利益が優先されている。つまり私たちは互いを支え合い尊重することや、生命を育む地球に支えられていることを見落としてしまつてゐる。

4年前、世界の国々は一致して「2030アジェンダ」を採択、SDGs（エスディージーズ）（持続可能な開発目標）を掲げた。世界を変革する指針であり、包摂性と多元主義、人々の権利を中心にして置く。多様性と包摂性が持続可能な経済成長や平和と安定につながるという確信のもと、政治、経済、社会システムの根本的な再編を目指してゐる。

この野心的な努力は、政治的な意志がなければ実らない。幸いこれまでには各国の協調により、世界では平均寿命が伸び、極度の貧困が減り、識字率は史上最高となり、オゾン層の破壊を食い止めてゐる。けれどもひとたび多国間主義を怠れば、経済は衰退し、不平等は広がり、気候は壊滅的なものとなる。さらに欠かせないのは、アジェンダを実現する方策において人々の尊厳や幸福、機会が確保され、差別がないようにしてることだ。

相互利益にもとづく解決策。社会を強靭（きょうじん）で平等にすることによる安全の担保。地球の持続可能性を優先する経済システム。これらを実現するため、私たちは思考を大胆に変え、包摂性を高めていく必要がある。

人のつながりから包摂が生まれる。ビジネスや学校、病院、メディア、市民社会。包摂性を高めていくのは私たち一人ひとりだ。そして政治と経済において包摂性を高めることは、私たちと地球が生き残るために喫緊の課題である。

『朝日新聞』8月1日 〈私の視点〉

劣夫跨驢不上 従転輪王行 便乗虚空 遊四天下 無所障碍

劣夫の驢に跨りて上らざれども、

転輪王の行くに従えば、

すなわち虚空に乗じて、

四天下に遊ぶに

障礙するところなきが」とし。

② 「劣夫跨驢」 凡夫が他力に乗ることによつて実現する〈目覚め〉の素晴らしさを 曇鸞大師（四七六～五四二）が巧みな譬えによつて示したもの。『淨土論註』の結論の末尾に説かれる。

如是等名為他力

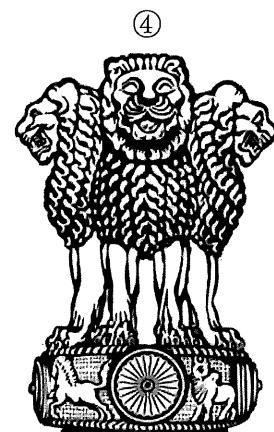
かくの「」とき等を名づけて他力とす。

劣夫跨驢不上從 轉輪王行使乘虛 空遊四天下無所 障碍如是等名為 他力

→ (藤井実書 「實乘」 は雅号)

→ アショーカ王の獅子柱頭 (法輪)

「サティヤム ハヴァ ジャヤテ 真理は自ずと勝利する」



(3)

⑤ 「転輪聖王」 (cakravartin) 古代インドの理想的な王。「転輪王」「輪王」「飛行皇帝」とも呼ばれる。刀杖によらず法 (ダルマ) によって大地を治める。宗教世界における「仏陀」に対応する世俗社会の統率者として、仏教やジャイナ教の經典に説かれる。

・「飛行皇帝」=象や馬などを含む壮大な編隊と共に空中を遊行し、四天下（須弥山の四方にある四大洲）を治める。『大智度論』には次のような譬えが出ている。
「如轉輪聖王飛上天。時四種兵及諸宮觀畜獸一切皆飛。轉輪聖王功德大故。能令一切隨而飛從。此亦如是。」
「譬如轉輪聖王飛行。一切營從及諸象馬衆畜皆亦隨去。」

(T1509_ 25. 0130b04)
(T1509_ 25. 0123c28)

⑥ 親鸞聖人は「劣夫跨驢のたとえ」を『教行信証』行巻に引用。

当にまた例を引きて、自力・他力の相を示すべし。人、三塗を畏るるがゆえに、禁戒を受持す。禁戒を受持するがゆえに、よく禪定を修す。禪定を修するをもつてのゆえに、神通を修習す。神通をもつてのゆえに、よく四天下に遊ぶが」とし。かくの「」とき等を名づけて自力とす。また、劣夫の驢に跨りて上らざれども、転輪王の行くに従えば、すなわち虚空に乘じて四天下に遊ぶに障碍するところなきが」とし。かくの「」とき等を名づけて他力とす。愚かなるかな、後の学者、他力の乗ずべきを聞きて、當に信心を生ずべし。自ら局分することなかれ、となり。

(『真宗聖典』一九六頁)

⑦ 曾我量深 「往生と成仏」 (一九六七年十一月十一日、三重県菰野町 金藏寺における講話)

私は仏さまと出でくわぬお念佛のない世界は「娑婆世界」、お念佛がある世界は「淨土」である。お念佛があれば、何處にあつても、どんな環境であつても、すべてみんなそこには「淨土」がある、そこに光がある——「うつとうやうにいつ」とだけは間違いない。何が間違うても、念佛をするときに仏さまと出でくわすならば、仏さまがあななひば、その仏さまと遇う世界——場所がすなわち「淨土」である。仏さまと遇うことができるなければそれは「娑婆世界」である。仏さまと遇うたと言えば、どんな所にあつてもそれは「淨土」であると、ハラハラよううに私どもは領解していく」とができるわけだと思う。

昔は、そういうことを言うと、「あれは不都合なことを言う」ということになつておつたけれども、世の中がだんだん変わつてくるというと、やはりそういうように本願の教えが本当の面目を現して・・・・・。『往生』というものは眞の生活——本当に生きることだと。如來の廻向によつて本当に生きる。

『曾我量深講話録』四（大法輪閣、二〇一六年）二二一～三頁